

老舎研究会会報 第 23 号

胡絮青女士 題字

以下「杉本」と略)の二篇の詳細な報告があるからです。

では、まず老舎研究会の軌跡を年表で。

1. 老舎研究会略史 (研究会成立前史を含む)

- 1981 『老舎全集』(学習研究社、全 10 巻)出版。
- 1982・3 中山時子先生の発案で老舎愛好者訪中団が結成され、北京の老舎のゆかりの地を訪問(済南の第一回老舎学術討論会にも参加)。
- 1983・3 老舎愛好者第 2 次訪中団、北京・重慶・武漢と老舎抗戦期の足跡を尋ねる。

< 名古屋時代 >

- 1983・12 老舎研究会発起人会。
- 1984・3 老舎研究会成立総会・第 1 回研究発表会。
柴垣芳太郎先生初代「代表委員」に就任)。
- 1984・4 老舎愛好者第 3 次訪中団、青島で開かれた第 2 回老舎学術討論会に参加。
- 1984・9 日下恒夫・倉橋幸彦編『老舎関係文献目録』(朋友書店)刊行。
- 1985・3 柴垣先生、渡燕。
「柴垣先生は、会創立後、当会を日本における老舎研究の文献センター資料」にすべく構想を立て、当時中国でも容易に見ることができなかつ

五十二而知使命

倉橋 幸彦

昨年の老舎研究会総会で、思いもかけず、日下恒夫先生を引き継ぎ第五代の「代表委員」に選出されました。

思えば、わたしは老舎研究会設立当時からこの会に参加させていただいており、それだけにずいぶん研究会のお世話にもなっています。それゆえに、四半世紀に亙る老舎研究会の歴史と伝統を若い世代に引き継ぐという橋渡し役、いわば「リリーフ登板」ということで代表委員に就任させていただくことになりました。

本来ならば、就任のあいさつなり抱負なりを述べなければならないのですが、私の代表委員としての第一の役目である「新陳代謝」の促進ということを考慮して、この場を借りてもう一度老舎研究会 25 年の足跡を辿り、今後の老舎研究会の行く末を案じる際の覚え書きにしたいと思います。

ところで、上で「もう一度」と申しましたのは、老舎研究会の紹介については、これまですでに第四代表委員日下恒夫の「老舎研究会の生まれる少し前」(『老舎研究会会報』第 17 号、2003・8・1、以下「日下」と略)と第五代表委員杉本達夫の「会報が 20 号に達するとき」(『老舎研究会会報』第 20 号、2006・9・1、

た老舎作品の初出掲載資料の収集に真っ先に取り組まれた。」(拙文「老舎研究会とわたし」(『TONGXUE』第29号、2005・1・31)

⇒『老舎と日中戦争』(東方書店、1995・7・30)

『柴垣文庫目録(老舎関係資料等)』
(龍谷大学瀬田図書館、2001・2
→ 2001・7・20 第2刷)

*「フランスの老舎研究家で、広く国際的に活動しておられるポール・バディ氏は、かねて中山時子氏を通じて本会入会の希望を伝えてきておられましたが、5月26日、北京にて正式に入会届けを提出されました。バディ氏は、本会のちょうど100人目の入会者となります。」(『老舎研究会会報』第3号(7・15)「事務局だより」 ■こんな時代もありました。

1986・3 第3次老舎学術討論会
(北京語言学院)。

1987・11 南開大学教授曾広燦氏を迎える。

1988・3 第4次老舎学術討論会(重慶)。

1988・12 『老舎事典』(大修館書店)刊行。

1989・7 舒済女士来日。

1989・11 舒乙氏夫妻来日。

<第一次大阪時代>

1990・7 藤井栄三郎先生、第二代「代表委員」に就任。(事務局は関西大学中国文学(日下)研究室)

1995・10 牛島徳次先生『『駱駝祥子』注釈』(同学社)出版。

<東京時代>

1996・7 杉本達夫先生、第三代「代表委員」に就任。(事務局は大東文化大学中国語学科(平松)研究室)

1999・2 老舎誕生一百周年記念学術討論会(北京語言学院)。

2001・4 事務局が早稲田大学文学部(高屋)研究室に移転。

2001・8 胡潔青女士「百日追思会」(中国現代文学館)。

<第2次大阪時代>

2002・7 日下恒夫先生、第四代「代表委員」に就任。(事務局は関西大学中国語中国文学(日下)研究室)

2003・7 老舎研究会第20回大会に傅光明氏を招待。

2004・12 杉本達夫先生『日中戦期 老舎と文藝界統一戦線』(東方書店)刊行。

2006・7 第5次老舎学術討論会(聊城)。

2007・12 伊藤敬一先生『「老牛破車」のうた — おおらかに、しなやかに日中友好を 伊藤敬一論文散文撰集』(光陽出版社)出版。

2008・9 倉橋、第五代「代表委員」に選出される。

2009・3 老舎生誕110周年記念国際シンポジウム。(北京語言文化大学)

2. 会の性格

次に会の性格についてですが、これは以下の引用を再度復唱しておきたいと思います。

「この会は、老舎読みやら老舎好きが年に一度相集い、いわゆる玄人素人の別なく、自由気ままに老舎とその周辺について語り合う会です。設立のきっかけから考えてみても、研究会というより愛好会の名が相応しいかもしれません。そのほうが純な感じがしませんか。」(日下)

大方の「老舎好き」の結集を望む次第です。

3. 会の活動

「研究会は毎年1回集まり、だいたい4名の研究発表を行っている。進んで発表を名乗り出る人はごく少ないが、とにかく途切れず続けている。私自身は過去に少なくとも5回発表している。5回という数は多すぎると思うが、会員が少なく、かつ新陳代謝が乏しいゆえの現象である。」(杉本)

参考までに、昨年までの発表者のリストを以下に列挙しておきます。() は発表回数。

飯泉彰裕・池田智恵(2)・石井康一(2)・伊藤敬一(3)・稲田直樹・今富正巳・牛島徳次(2)・雲野葉子・大田加代子・大辻富美佳(2)・大塚秀明・岡部謙治・岡本俊裕・緒方 昭・尾崎 實・金森由美子・日下恒夫(4)・倉橋幸彦(9)・斉藤匡史・櫻井龍彦・柴垣芳太郎・杉野元子(4)・杉本達夫(6)・高橋弥守彦・高橋由利子(3)・武永尚子・谷川 毅(2)・谷口知子・中野耕一・中山時子(2)・南雲大悟・橋本幸枝・花城可裕・平松圭子(4)・藤井栄三郎(7)・藤井 宏・布施直子(6)・牧田英二・松村茂樹(2)・孟 丹・森本まみ子・山口 守・弓削俊洋・吉田世志子(2)・劉 孝春・渡辺武秀(4)・渡辺安代(五十音順)
(海外の発表者)
範 亦豪・傅 光明・郝 長海・李 輝・李 玉敬(2)・林 海音・舒 濟(2)・孫 鈞政・王 端(拼音順)

もう一つの会の活動は、年一回の会報の発行ですが、「会報もまた途切れることなく続いてきた。研究論文を掲載するほどの分量はないが、書評や報告そのほか、文字を通して会員の動きが何となく分かるのではあるまいか。」(杉本)

会報の発行状況を以下にメモしておきます。

<名古屋>

第1号(1984・3・31) *4頁
第2号(1984・12・10) *胡潔青女士題字
第3号(1985・7・15)・第4号(1985・12・15)・第5号(1986・6・30)・第6号(1987・4・15)・第7号(1988・7・10)・第8号(1989・3・1)・第9号(1989・7・10)・第10号(1990・4・25)

<大阪>

第11号(1991・7・15)

■事務局の怠慢です。反省至極。

<東京>

第12号(1998・7・22)・第13号(1999・7・21)
第14号(2000・7・21)・第15号(2001・7・27)
*早稲田新版：好文出版
第16号(2002・7・26)・第17号(2003・8・1)

<第2次大阪>

第18号(2004・7・31)・第19号(2005・8・5)
第20号(2006・9・1) *20頁
第21号(2007・9・1)・第22号(2008・9・15)

さて、このように老舎研究会は、今月号に掲載させていただいた杉本達夫先生の「発言」稿にあるように、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」をモットーに、歴代の代表委員と事務局のご尽力並びに会員諸氏の協力で今日まで継続してまいりました。

さてさて、最近はやたらと「激辛」が好まれるご時世ながら、一粒の「山椒」の深い味わいをもう一度噛み締めるためにも、会員みなさまのお知恵を拝借したいと考えております。

老舎先生ではありませんが、人間50にもなれば、どうしても「保守病」・「貧血病」(「五十而知使命」)にかかるといふもの。

新しい血の導入を切に望みます。

紀念老舍先生誕辰 110 周年 國際學術研討會參加報告二則

「老舍の二つの顔」というわたしの発言

杉本 達夫

2009年2月3日から3日間、北京市内の西郊賓館を主会場に、老舍生誕110年記念の国際シンポジウムが催された。以下に記すのは、初日の「座談会」における杉本の発言である。いかにも厚顔の沙汰ながら、ご笑覧いただきたい。〔中略〕以外の修正はない。

老舍の阴阳两个面貌

今天是老舍诞生一百十周年的纪念日。老舍生在清朝末期，经过中华民国，死在中华人民共和国。他所经历的67年，正是中国苦难的时代，他的文学生涯也离不开整个中国的苦难的历史。老舍的文学生涯长达40年。今天还有很多读者爱看他的作品，很多学者，老中青各代的研究家，陆续结出硕果问世，这正说明老舍文学怎样含有丰富的跨越时代的生命力。

我是日本老舍研究会的一个成员。日本有很多以中国文学为对象的研究会。现代当代文学的研究会，个别作家的研究会也不少。〔中略〕。老舍研究会是其中的一个。规模不大，可是已经有20多年的历史，每年开年会，出会报，就是所谓‘麻雀虽小，五脏俱全’，用日本的俗话说‘花椒虽小味辛麻’。研究会还会继续下去，各个会员也会在各自的研究基地努力下去。

我自己的老舍研究，只在文字上，靠着不可靠的汉语能力，看老舍作品和有关资料，止于管中窥豹，成绩很不理想，深感汗颜。可是今天，还是大着胆子说几句。

关于老舍，石兴泽先生曾经提出过老舍的‘四重意识’论，把老舍总括为‘复杂而微妙的

四重奏’。关纪新先生以满族的民族文化作背景，作基础，来剖解阐明老舍的文学世界。傅光明先生从关于老舍之死的口述历史的研究再走一步，就在中国现代历史里走过来的知识分子，所担负的重担子，所走的荆棘载途，进行了深刻的研究。其他很多研究专家也提出好多成果。我读过的范围实在狭小，可是得到的启发帮助却很丰富，在这儿衷心表示感谢。

我每每模糊感觉老舍有几个面貌，随时能够像戏曲里的变脸那样换面貌，那几个面貌到底可以归结为阴阳两个面貌。

阳的一面是文学名作作者的老舍，是爱好老舍作品的人们所爱好的老舍，是保持自己原型不变的老舍。这种老舍主要出现在民国时期。阴的一面是为政治服务而被政治背叛的老舍，是被吞没在现代史的黑洞里的老舍，是不管自觉地还是不自觉地，好像有些脱离了自己原型的老舍。这种老舍主要出现在五六十年代。阴阳两面当然不能简单的分开，阴里有阳，阳里有阴，阴和阳不断混杂移流，这是不变的道理吧。老舍的阴阳也不会是例外。

老舍是大名鼎鼎的作家，曾经是大学教授，还吃过多年洋饭。客观上的老舍无疑是个知识分子，可是主观上的老舍，好像不认为自己是知识分子。主观上，他是老百姓中的一个，把自己从头到底规定为写家，不是作家。写文章也往往是工人做东西的作风，谁来订货就拿货给谁那样的行为，不一定是作家灵魂深处呼唤来的主题。抗战时期的话剧一半是这样吧。回教协会来要，老舍就写《国家至上》，东方文化协会来要，老舍就写《大地龙蛇》，等等，等等。当然，因为这样，他才能够是个‘抗战文艺运动的一个小卒’同时是一大主将。这是因为他自认为是老百姓，是跟曲艺艺人一个小兵同一个地平上的存在，才能够做得上的，我想。做为老百姓的自我认识给他的文学带来了一大特征，在艺术性上加上了通俗性，使他的作品内容丰富多彩，文学生命更有普遍性。

顺便说一下，昨天傍晚，我在外面走走，天上有月牙儿。《月牙儿》是我最喜欢的作品。那是老舍以小说的形式写的散文诗，是杰出的作家写出来的杰作，决不是作家写出来的平凡之作。

因为是老百姓，所以，对建国以后的思想改造，好像也没那么感到强风，想得不那么深刻，比较顺利地过关，能把自己认定是党的喇叭。他好像对自己作为知识分子的处境不那么自觉，是不是？可是坐在文化界领导人地位的客观存在，不许老舍处于主观上老百姓的地位。这两者到底不能不分裂，不管老舍的内心世界怎么样，外面社会抓住他的明显的地位。带有文艺界高级头衔的老舍，到底不能躲进老百姓的老舍里，老百姓的老舍到底不能保护知识分子的的老舍。

老舍的最后是悲惨的，是认真服务政治而又被政治背叛的悲剧。他所爱的北京人不能保护他，相反，对他动武逼死的，竟是他所爱的北京少女少年，这是双重的悲剧。我是外国人，不该对贵国的事情插嘴，可是，不愿意再看同样的悲剧，我衷心希望在贵国社会里，贵国知识分子的身上，不会重演老舍的悲剧。〔中略〕。

最后，我敬祝这次的研讨会成功，敬祝与会的各位专家发展飞翔！

「龍鬚溝」をめぐる

布施 直子

1、はじめに

本年2月3日～5日に北京で開かれた「紀念老舎生誕110周年国際學術研討会」の会期中の一晚、首都劇場で北京人民芸術劇院(北京人芸)による話劇「龍鬚溝」を観させてもらった。北京人芸は今回の国際學術研討会の主催単位の一つとして名を連ねている。チケットには「贈票請勿出售」と印字してある。一般の話劇愛好者としてチケットを買うなら、一枚500元もするそうだ。

老舎はこの作品によって「人民藝術家」の称号を得た。その話劇「龍鬚溝」を鑑賞する機会

を与えられて、私はうれしく、またたのしみだった。首都劇場は1999年2月の老舎生誕100周年のときには、大規模な改築工事が行なわれていたのだった。今回劇場内にはいるとロビーに、台座から頭部まで2メートル以上ありそうな、老舎、曹禺、焦菊隱の胸像が並んでいる。

私は話劇「龍鬚溝」の原作を読んだことがなく、映画「龍鬚溝」を北京の対外友協で見せてもらったのが1982年、その後日本のテレビで放映されたのか、我が家にはビデオテープがある。当時モノクロの暗い画面を食い入るようにしてみたが、会話はほとんど理解できず、于是之の悲しげな「程瘋子」の顔と、雨が降るたびに苦難をしいられる貧しい住民の暮らしぶり、金魚を得て喜ぶ「小妞」の愛らしさ、激しい雨の中での小妞の死に対する母親および隣りあって暮らす人々の悲嘆、やがて、共産党政府によるどぶ川の改修が出来上がり、歓喜する人々の圧倒されるほどのエネルギー…。今度は少しはせりふが聞き取れるだろうかとの期待と、話劇「龍鬚溝」を実際に観られるといううれしさがあった。

幕が上がると舞台の照明はとても明るく、塵一つ無いほどに感じられる清潔な舞台だ。舞台には貧しい4軒の住まいがあり、続いて、隣り合って暮らすひとびとの会話が交わされる。残念ながら、せりふの意味があまりわからない。肝心のところがわからなくてどうしようもない。せめて小妞がどうして死んでしまうのか、注意していたがわからなかったのは残念。場面転換が回り舞台であったのは、みごとで、びっくりした。最後の大団円では、程瘋子の「単弦」で盛り上がり、幕となった。全幕を見終わって、どうも老年二人と若者二人、2組の恋愛模様が挟み込まれていたよう(これについては、以下の「2」を参照)だが、これは原作にあったのだろうかとの思いが残った。

2、1953年の「龍鬚溝」と2009年〈新版〉 「龍鬚溝」

話劇「龍鬚溝」が初演されたのは、1951年で、話劇・歌劇・舞踊を総合して演じた「老人芸」によるものであった。その後、話劇専門の劇団として1952年6月、人民芸術劇院が成立。1953年、その人芸が「龍鬚溝」を公演した。以来この話劇は劇団の代表的な古典演目となる。程瘋子を演じたのは当時23歳の于是之で、上演されるや一躍その名を轟かせることになった。

種々の理由により半世紀の長きにわたって、上演されることのなかった話劇「龍鬚溝」が2009年1月14日、再演の幕が開けられるに至った。

その経過と再演にともなって付け加えられた新鮮味について、2009年1月16日付『人民日報海外版』掲載の呉月輝記者「塵封半世紀話劇《龍鬚溝》重整帰来」は次のように紹介している。

舒乙氏が、2009年は新中国成立60周年であり、老舎生誕110周年にあたることから、北京人芸に「龍鬚溝」の再演を強くはたらきかけた。劇院では多方面から斟酌した結果、2008年6月16日、演出の顧威氏（曲劇「龍鬚溝」の改編者の一人）は北京人芸が正式に組織を立ち上げ、「龍鬚溝」の練習を開始することをメディアに発表した。しかしながら、かくもさまざまなことを含みこんでいる古典的話劇が、今回どのようなかたちで舞台にのせられるのだろうか。

半年間の磨きをかけられたのち、ついに新しい演出による「龍鬚溝」の幕があがった。

呉月輝記者が指摘する新演出の「龍鬚溝」の新鮮味は以下の五点である。

改変その一

原著の結末では、「程瘋子」は水道の蛇口の

番人になり、新しい生活を歩み出す。新演出では芸人出身の程瘋子に再び芸人としての身分を取り戻させ、再び「単弦」を唱わせる。

改変その二

特殊な歴史の時期には、脚本に対してさまざまな改訂がなされたが、今回の公演では原著が回復された。チンピラが程瘋子に謝りに来た場面で、程瘋子が「你这也是人手啊！（なあんだ。お前の手も人間の手だ）」と言うところはその一例で、全面的に老舎先生の書かれた当初の状態に復した。

改変その三

今回ストーリーの流れの中で二筋の愛情の糸が付け加えられた。一つは二嘎子と二春の青春の恋、もう一つは二春の母親と趙大爺の「黄昏恋（老いらくの恋）」。

于是之の演じた舞台では、新中国が成立した後、基本的にスローガンばかりで、現在の観客には面白みが感じられない。愛情劇を加えることで、興味がわき、おもしろくなる。この改編は、人芸内部の審査で質疑が重ねられ、年配の芸術家たちには当時の時代情勢と合わないと思われたが、演出の顧威はこの方針を貫いた。

改変その四

原著で老舎が「単弦」芸人の程瘋子の唄いのために書いた詞は、数来宝で書かれているため、于是之も数来宝で演じた。今回は曲劇団の作曲家に頼んで曲をつけ、程瘋子を演じる楊立新（ダブルキャスト）は「単弦」で唄った。

改変その五

顧威の演出は、回り舞台を使うことに長じており、今回も例外ではない。この他、舞台に溝を掘り、降雨のとき、あるいは改修以前の龍鬚溝に住民が汚水をあける場面は真に迫ってい

る。

3、「龍鬚溝」をめぐって

私は1951年、1953年の話劇「龍鬚溝」を観ていない。が、1952年に制作された映画「龍鬚溝」は、話劇「龍鬚溝」に近いものだったのではないかと思う。(話劇と、映画との違いをさておき。)映画「龍鬚溝」の画面は暗い。物が不足して、照明も十分ではなかったという理由もあるかもしれない。画面の明度の足りないことで、描かれた時代の暗さを感じる。また、画面が暗いにかかわらず、怒りや悲しみ、また苦難を撥ねのけてはじける時代の精神が伝わってくる。

せつかく今回の観劇の機会を得ながら、会話のかなりの部分を理解できず、また、今回の「龍鬚溝」が1951年、1953年に上演された「龍鬚溝」を基本的には踏襲しながらも、部分的に改編されて舞台にかけられたことすらわかっていなかった。たまたま人民日報海外版の記事に出会って、改編が上記のようなものと知った。

2009年上演の「龍鬚溝」に対して、私は、1952年のせりふもわからないながら見た映画「龍鬚溝」によって感じとった、新中国成立からまだそう時間を経っていないころの中国の、時代の熱気を求めていたのではなかったか、と思う。だから、2009年上演の「龍鬚溝」に、はっきりと表現できないながら、すこしの物足りなさを感じていたようだ。

今回の学術研究会の分科会でも、老舎文学作品の演劇や映画への改編問題が提起されていたが、これを契機に、今後は老舎の原著をゆっくり読み味わうことにより、改めてこの問題について述べてみたいと思う。

∞・∞・∞・∞・∞・∞・∞・∞・∞・∞

「胸のつかえ」の行方 —関紀新著『老舎与満族文化』 に触れて—

杉本 達夫

老舎は1961年、義和団の戦い60周年を記念して、戯曲『神拳』を書き、その後書きとして随筆「吐了一口气」を書いた。「吐了一口气」とは、「もやもやと溜っていたものを吐き出して、胸がすうっとした」ということだろう。戯曲『神拳』で老舎は、北京西郊の農民たちが義和団に加わって戦うさまを描いた。農民たちは教会を焼き、神父を殺し、教会と結びついた悪徳地主を襲い、その屋敷を焼く。義和団の戦いを老舎は、非道に苦しむ農民の抵抗、悪に対する正義の蜂起として描く。幼いころから抱いてきた義和団のイメージを、老舎はようやく吐き出したのであり、マイナスイメージで語られてきた義和団のために、名誉回復を果たしたのである。

61年と言えば、中国は内外に大患を抱えていた。大飢饉と国際的孤立…中ソ関係の悪化、アメリカとの対決…。そして老舎は「吐了一口气」のなかで、かつて北京で略奪を重ねた「文明強盗」と非難するとともに、目前の「美国強盗」をも糾弾している。それは連合軍との戦いで父を失った怒りの表現であるとともに、当面の国策に沿う発言でもある。

では老舎は、『神拳』を書くことによって、長く溜めてきたもやもやを吐き出したか。胸がすかっとしたか。そうではあるまいとわたしは思う。『正紅旗下』はあるいは気が晴れる作であったかもしれないが、これは未完に終わった。溜めてきたもやもやとわたしが推測するのは、老舎が属する満族のことである。満族の歴史と文化に対する世の無理解や、旗人の末裔の悲惨な命運をめぐる怒りについてである。老舎は作

品の中にたくさんの満洲人を登場させたが、とくに満族をテーマに取りあげて語ることはなかった。民族的要因によほど敏感な読者でなければ、気づかぬままに読み過ごすだろう。たとえば初めて『駱駝祥子』を読んだとき、読者は祥子や小福子は何族か考えるだろうか。『月牙兒』を読んで、「わたし」は何族か考えるだろうか。わたしたち外国人読者はもちろんのこと、中国国内であっても、そういうことには無頓着な読者が大半なのではあるまいか。

関紀新氏の新著『老舎与満族文化』（遼寧民族出版社、2008年3月）を読んで、ああ、これは関氏の「吐了一口氣」なのだろうかと、わたしは感じた。これは満族の歴史と文化の背景の中で、老舎の文学を浮かび上がらせる学術書である。関氏は中国社会科学院民族文学研究所に身を置いて、長く満洲学研究に従事してきた人物である。中国老舎研究会の重鎮であり、『老舎評伝』をはじめ、老舎や民族文学に関する多くの著述がある。その関氏の学術書を読んで、関氏が胸に積もり積もった思いを吐き出したと感じたのは、滅満興漢の革命後の満族への抑圧と偏見、満族の歴史と文化についての世の（漢族の）誤解が語られ、是正されているからであり、それを関氏が今ようやく語りえたところからである。

清朝はかつて、シベリアにまで版図が広がる大帝國を作り上げた。中国の今日の領土は、チベット、ウイグル、台湾も含めて、すべて清朝の時代に定まっている。だが辛亥革命後、清朝は忘れ去られた。満族という民族も、存在の場を失った。新中国になって、民族が認定され、今日、満族自治県が幾つかあるものの、清朝が中国史上に果たした役割や、満族が生み出した文化史上の成果は、多くの人の意識から消えたままなのだろう。

老舎は世に名高い作家であり、老舎の読者は老舎についてはだいたい分かったつもりでい

る。だが関氏によれば、分かっているのは表面的な老舎であり、老舎がなぜそのような存在であるかは分かっていない。老舎は多くの謎を抱えたブラックボックスなのであり、そのボックスの中身を解明するのが本書である、と関氏は言う。その解明の過程で、満族の歴史、旗人の制度と生活感覚、文化、言語、精神、文学、芸術……が、具体的事実を伴って示され、老舎作品を特徴づける満族的要因が、その要因の老舎的处理が、詳細に語られるのである。

わたしは18歳の時、翻訳で『四世同堂』を読んだ。初めて読む老舎作品だった。が、その時は、人物の誰が何族であるか、人物の民族的背景がどうであるかなど、まるで気が回らなかった。後に抗日戦期の老舎について調べた時も、老舎が自らを黄帝の子孫に含めていて、満族である事実は一切触れないことに疑問を覚えながら、その意味を問い詰めることがなかった。老舎は愛国の情の権化のような作家であるが、その愛国の情とは、満族への愛と二重合わせになっているのであり、満族への誇りの上に、中華民族への誇りが成り立っているのだと、今あらためて実感する。同時に、老舎はたくさんのもやもやを溜めこんだまま逝ってしまったのだなとも思う。関氏の本書は詳細な研究書でありつつ、実り豊かな啓蒙書である。全8章と跋から成る本書の全容を紹介するゆとりはないが、わたしはまことに多くを教えられた。こういうことを言うのは、自分の無知の表明にほかならず、実は恥ずかしいことなのであるが。

老舎は満族の一員ではあるが、現代中国を代表する作家の一員であり、国際的に著名な作家である。その老舎を少数民族作家に数えることに、わたしは戸惑いを覚える。だが、国際的であることは無国籍であることではない。逆に、より土着的であるほどより普遍性を持つことは、民族形式論争の時にも共通認識になったのではなかったか。老舎の文学に塗りこめられ、

洗練された満洲的要因が、満族を知らぬより広い世界の読者にとっても、大きな魅力になっているのだろう。

(2009年8月15日)

『老舍全集』所収「駱駝祥子」校読(5)

小生 常談

[第 13 章]

①【全集】棚里有玻璃隔扇，挂面屏，见木头就包红布。(第 116 頁正 6 行)

【人間】棚裏有玻璃隔扇，掛畫屏，見木頭就包紅布。(第 157 頁倒 3 行)

[按語]：「畫屏」→「面屏」は、【文集】に基づく。

②【全集】刘四爷觉得冯先生真是心细，当时要再约两手，和冯先生打几圈麻将。

(第 118 頁正 3 行)

【人間】劉四爺覺得馮先生真是心細，當時要再約兩手，和馮先生打幾圈麻雀。

(第 113 頁正 6 行)

[按語]：「麻雀」→「麻将」は、【人民】に基づく。

③【全集】早八点半，先给你们摆，六大碗，俩七寸，四个便碟，一个锅子；

(第 118 頁倒 11 行)

【人間】早八點半，先給你們擺，六大碗，兩七寸，四個便碟，一個鍋子；

(第 161 頁正 5 頁)

[按語]：「兩」→「俩」の訂正は、【晨光】に基づく。

(注)：なお、「拳着腿」→「蜷着腿」・「眼胞兒」→「眼泡兒」・「挂簷」→「挂檐」・「蠟杆」→「蜡杆」等の表記の規範に関する改訂は採らなかった。

[第 14 章]

①【全集】连赌钱，他都预备下麻将牌，比押宝就透着文雅了许多。

(第 120 頁正 9 行)

【人間】連賭錢，他都預備下麻雀牌，比押寶就透着文雅了許多。

(第 163 頁倒 6 行)

[按語]：同 [第 13 章] ②。なお、【人間】の第 168 頁倒 1 行と第 169 頁正 3 行では、「麻将」とする。

②【全集】八点多就开了饭，车夫们都有点不愿意。(第 121 頁正 6 行)

【人間】八點多就擺了飯，車夫們都有點不願意。(第 164 頁倒 5 行)

[按語]：「擺(飯)」→「开(飯)」は、【晨光】に基づく。

③【全集】心里这么想，嘴里就念道着，带着许多街面上已不通行的咒骂。

(第 125 頁正 10 行)

【人間】心裏這麼想，嘴裏就念道着，帶着許多街面上已不通行了的咒罵。

(第 170 頁倒 6 行)

[按語]：「了」の削除は、【晨光】に基づく。

④【全集】“你自己要花钱办事，碍着我什么啦？”(第 125 頁倒 9 行)

【人間】『你自已要花錢辦事，害着我什麼啦？』。(第 171 頁正 2 行)

[按語]：「害」→「碍」は、【文集】に基づく。

⑤【全集】“碍着你什么了?……”

(第 125 頁倒 8 行)

【人間】『害着你什麼啦? ……』

(第 171 頁正 3 行)

[按語]：同⑤

⑥【全集】祥子把苔帚扔了，直起腰来，看准了刘四，问：“说谁呢？”

(第 126 頁倒 2 行)

【人間】祥子把荇帚擲了，直起腰來，看準了劉四，問：『你說誰呢？』
(第 172 頁倒 2 行)

[按語]：「擲」→「扔」は、【晨光】に基づく。「你」の削除も、【晨光】に基づくが、【晨光】は、『說誰呀呢？』とする。

〈注〉：なお、「(他的氣兒) 躡(下點去)」→「塌」・「咚咚擦」→「咚咚擦」・「儿土婿」→「儿婿」等の表記の規範に関する改訂は採らなかった。

[第 15 章]

①【全集】教她尝尝，她就晓得了，到底是爸爸好，还是野汉子好！
(第 130 頁正 7 行)

【人間】教她尝尝，他就晓得了，到底是爸爸好，還是野漢子好！
(第 124 頁倒 3 行)

[按語]：「他」→「她」の訂正は、【晨光】に基づく。

②【全集】他想不到哭，他想不到笑，……。
(第 131 頁正 11 行)

【人間】他想不到哭，也想不到笑，……。
(第 131 頁正 11 行)

[按語]：「也」→「他」は、【晨光】に基づく。

③【全集】他不安于游手好闲，可是打算想明天的事，就得去和虎妞——他的老婆商议；……。(第 132 頁正 7 行)

【人間】他不安於游手好閒，可是打算想明天的事，就得去和虎妞——他的老婆————商議；……。
(第 180 頁倒正 6 行)

[按語]：「! —」の脱落は、【人民】に基づく。

④【全集】这不是什么体面的事，越少在大家眼前显摆越好。(第 135 頁倒 10 行)

【人間】這不是什麼體面事的，越少在大家眼

前顯排越好。(第 185 頁倒 7 行)

[按語]：「體面事的」→「体面的事」の訂正は、【晨光】に基づく。

⑤【全集】吃人家的粮米，便得老老实实的在笼儿里，给人家啼唱，而随时可以被人卖掉！(第 137 頁倒 9 行)

【人間】吃人家的糧米，便得老老實實的在籠兒裏，給人家啼叫，而隨時可以被人賣掉！(第 188 頁正 7 行)

[按語]：「啼叫」→「啼唱」は、【人民】に基づく。

〈注〉：なお、「作飯」→「做饭」・「顯排」→「显摆」・「嗎」→「嘛」・「臭米珠紅」→「臭烘烘」等の表記の規範に関する改訂は採らなかった。

[第 16 章]

①【全集】死了，棺材得去向“善人”们募化。
(第 140 頁正 2 行)

【人間】死了，棺材得去向善人們募化。
(第 191 頁正 6 行)

[按語]：「”」の挿入は、【人民】に基づく。

②【全集】他可是卖了力气，虽然明知跑不过后面的三个小伙子，可是不肯倚老卖老。(第 141 頁正 11 行)

【人間】他可是賣了力氣，雖然明知跑不過後面的三個小夥子，可是不肯以老賣老。(第 193 頁正 4 行)

[按語]：「以老賣老」→「倚老賣老」は、【人民】に基づくが、これは表記上の規範による改訂と見なすべきか？待考。

③【全集】那个高个子独自踉了半天，干嗽了一大阵，吐出许多白抹子来，才似乎缓过点来，……。(第 141 頁倒 2 行)

【人間】那個高個子獨自踉了半天，哽的乾嗽了一大陣，吐出許多白抹子來，纔似乎緩過點來，……。

(第194頁正2行)

[按語] : 「哽哽的」の削除は、【人民】に基づく。

- ④【全集】她坐在炕头上, 呆呆的, 渺茫的追想婚后的快乐; 全身像一朵大的红花似的, 香暖的在阳光下开开。

(第146頁正2行)

【人間】她坐在炕頭上呆呆的, 渺茫的追想婚後的快樂, 這點快樂也不在這兒, 也不在那兒, 只是那麼一點說不上來的什麼意思, 全身像一朵大的紅花似的, 香暖的在陽光下開開。

(第199頁倒3行)

[按語] : この削除は、【人民】に基づく。

- ⑤【全集】他只觉得自己, 比起初到人和厂的时候来, 老了许多许多。

(第146頁倒5行)

【人間】他只觉得自己——比起初到人和廠的時候——來, 老了許多許多。

(第201頁正1行)

[按語] : この標点符号の改訂は、【人民】に基づく。

(注) : なお、「(臉)沈得」→「(臉)沉得」・「摺蹶子」→「尨蹶子」等の表記の規範に関する改訂は採らなかつた。

1966) の作品『四世同堂』や『茶館』などにはそんなことば〔☆「生粋の北京っ子が話すことば」〕が頻出するが、掲載語彙の少ない簡単な辞書には載っていない語彙も多く、慣れるまでには相当苦勞するものだ。『北京話常用字彙』(1983年、鈴木出版)〔★『北京話詞語例釈』、1982年の誤り〕というそれ専門の単語集まで作られているほどだから、中国の人だって北京方言がわからないことがあるのだ。しかし普通話と北京方言がちがうということに当の北京っ子はなかなか気づかないし、もし気づいていても知らんぷりで、堂々と「北京弁」をしゃべり、わからない方が悪いんだと得々としていることが多い。」(p.58)

〈再録〉

尾崎 實「現実を注視する描き方——

老舎の《月牙儿》から——」

『尾崎實中国語学論集』好文出版

(2月13日) p.191-200

■初出は、『関西大学中国文学会紀要』

第37号(昭和60年3月)

尾崎 實「老舎の小説における“为是”の用法」

同上 p.201-216

■初出は、『関西大学文学論集』

第41巻第4号(平成4年3月)

老舎関係文献略目 (13)

倉橋 幸彦(編)

【2007年】

阿辻哲次「北京方言と普通話」

『近くて遠い中国語』[中公新書1880]

中央公論新社(1月25日)第2章 中

国語はどのような言語か p.56-58

*「北京をこよなく愛した作家老舎(1899~

監訳: 大山潔

訳: 富岡由紀子・三富志恵子・榎本智子

『戯曲 駱駝祥子 第一幕』

樹花舎(2月25日) 205頁 カバー、オビ

◆老舎(1964年): 写真1葉/梅阡(1998年、82歳): 写真2葉/辺波: 戯曲『駱駝祥子』に寄せて・代前言2頁/大山潔(陸潔): 訳者の前書き・译者序4頁/演出中の梅阡(1981年): 写真1葉/目次1頁|| 駱駝祥子 第一幕(原作: 老舎/脚本: 梅阡) 1-193 || あとがき194・后

記195／参考文献196－197／1920年前後北京城略図198／付録1 北京の街199－203／付録2 民国期の通貨名称204－205

*「訳者の前書き」：『戯曲『駱駝祥子』は、梅阡が脚色したもので、1957年に月刊誌『劇本』（7・8号連載）に発表、間もなく北京人民芸術劇院のベテラン舒繡文、方瑄徳、于是之らによって上演された。1962年までの上演回数は139回にのぼったが、文化大革命の前後、18年間の空白を経て、1980年に同劇院の名優李婉芬、李翔、英若誠、于是之らによって再演上演されるようになった（1982年までの上演回数は82回）。／梅阡、1916年天津生れ、2002年2月17日に北京で病死、享年86歳。1942年に上海東呉大学法学院卒業。1938年から映画や演劇の脚色と演出の仕事に関わり始め、上海や北京の映画制作会社で、『第二代』『滿庭芳』『復活』『碧血千秋』『粉筆箏琶』『桃花扇』等十数本の映画を脚色・演出した。1951年からは北京人民芸術劇院の監督に就き、『駱駝祥子』『汾水長流』を手懸け、焦菊隱と合同で郭沫若の『虎符』及び『武則天』『膽劍篇』等の時代劇を演出。文革の後『咸亨酒店』を脚色、演出し、林兆華とともに『丹心譜』を、蘇民とともに曹禺の『王昭君』を演出。80年代初めの連続テレビドラマ『末代皇帝』の製作に当たり、総演出・顧問を担当した。焦菊隱、夏淳、歐陽山尊と並んで「北京人民芸術劇院の四大演出家」と称されている。このほか、彼は中国画の花鳥画にも没頭し、晩年に至りさらに孜孜としていそしむ。梅阡はまた兼職の弁護士でもあり、彼が直接或いは間接に携わった案件は、皆解決に至った。（北京人民芸術劇院梅阡葬儀委員会「梅阡生平簡介」参照）／1957年に『駱駝祥子』の戯曲台本が連載、北京人民芸術劇院を主とする様々な劇団により上演された後、単行本として刊行（1958年、中国戯劇出版社）、演唱形式の評劇に脚色され（1958年、袁韻宜執筆、『評劇大観』第5集）、

後の映画（1982年、監督凌子風）、そして現代京劇（1998年、江蘇省京劇院、2002年訪日公演）に大きな影響を与えた。日本でも1960年に黎波氏により全訳され、劇団「泉座」によって上演された。しかし、この全訳は出版に至らず、その後、香坂順一氏が注編した『シナリオ「駱駝祥子」』（第一幕、1983年）をのぞき、新たな研究成果は見当たらない。／今度の『戯曲・駱駝祥子・第一集』の中日対訳本は私と中国語を学ぶ生徒三人との合作である。メンバーの中には私が日本に来て間もないときから一緒に中国語の勉強を始めた者もあり、19年来、私達の間には結婚、出産、学業、仕事、病気、定年退職、転居等……いろいろとあったが、中国語の勉強は細々ながらも続いてきた。彼女たちの学ぼうとするひたむきな心、そして中国文化に対する熱意に私は深い感銘を受け、その努力を何らかの形で残すことができないかと考えるようになり、本書の作成・出版を提案したのである。／しかし、たった一幕に、7年間もかかるとは全く予想もしなかった。もともと私達自身のために作り始めたこの小さな本だが、もし誰かの目に留まり、少しでも役に立てたらと、心から願って止まない。／テキストは、『〈駱駝祥子〉的舞台芸術』に含まれる1981年の『演出台本』（上演シナリオ）を底本とし、1958年の刊本を校本とした。発音の表記については、できるだけ生きた北京語に近づくように努め、北京人民芸術劇院の上演実況録も参照した。

*「あとがき」：「私たちが『駱駝祥子』という作品に初めて触れたのは香坂順一氏の『シナリオ「駱駝祥子」』である。「駱駝祥子」は今から80年程前の北京の下町で暮らす庶民たちの生活を描いたものであるが、そのような作品の、しかも舞台脚本で中国語を学習するなんて私たちにとって初めてのことであったし、それまでに学んだ経験のない、生き生きとした、土着の会話に驚かされ、戸惑うことも多くあった。

しかし香坂氏の豊富な注釈を参考とした学習を通して、当時の中国社会の底辺に暮らす人々に接し、また作者である老舎が彼ら庶民に深い愛情を注いでいたということも感じることができた。／本として出版しようとなつてからは、細かい日本語表現について意見が分かれたり、昔の生活にはあつたけれど、時代に合わなくなり使われなくなった言葉をどのように伝えるのか悩み始めた。その頃幸いにも1960年の黎波氏の訳に出会い、私たちはそれを参考にし、大いに助けられたのだ。彼の訳はとても臨場感があり、それでいて自然体で、その表現に脱帽し、嫉妬さえ覚えた。／そのような中でも、私たちは自分たちの言葉で表現し、中国語をただ直訳するのではなく、登場人物たちの気持ちが違和感なく伝わるような意識に努め、踏み込んだ中国語の解説や会話の背景にある中国の歴史や文化も理解できるような説明に心がけた。また、中国語の本文に『駱駝祥子』の北京方言を再現したようなピンインをつけた。／この本に用いる写真を撮るため、私たちは夏の北京へ出かけた。『駱駝祥子』に登場する城楼や通り、牌楼や胡同などを訪ねたり、今までとは違った思いで古い街を懐かしみながら歩いていると、古い建物や歴史あるものが既になくなっていたりした。人々の生活が豊かになり、益々の発展が予感される中国であるが、四合院のような昔ながらの建物には古い歴史や人々の暮らしがたくさん詰まっており、そのような建物や人情がとても素晴らしく、貴重なものであるということも忘れないでほしいと思った。」(p.194)

吉田世志子「新中国の船出に間に合わなかった老舎—『四世同堂』で描いた知識人に自ら擬す」

『関西大学中国文学会紀要』

第28号(3月20日) p.75-95

◆ 1. はじめに／2. 淪陥区「北平」に住む知

識人の苦悩／3. 勃興期の「新中国」における老舎の葛藤／4. 『飢荒』中断に込めた老舎の決意／5. おわりに

秦 耕司「老舎『微神』冒頭の一段—言語表現より作者の真意を探る」

『長崎県立大学論集』(長崎県立大学経済学部学術研究会) 第40巻第4号
(3月30日) p.73-88

渡辺武秀「老舎『国家至上』試論」

『八戸工業大学紀要』第26巻
(3月31日) p.125-137

横田文良「文豪・老舎先生蓮の花を食べられる」

『中国の食文化研究〈山東篇〉』
辻学園調理・製菓専門学校
(4月9日) 済南、p.193-198

*「中国の小説家で劇作家の老舎(本名:舒慶春・一八九九〜一九六六年)がいた。我々は『駱駝の祥子』、『四世同堂』などの著作を読んで知る人だ。／彼が「済魯〔★齊魯〕大学」の教授をしていた頃に『蓮の花を食う輩』という短文を書いている。／ある夏、老舎は蓮の花を観賞すべく二鉢の白蓮(白い花の蓮)を植える。準備したのは「北平(北京)」で見つけた古美術の古鉢、そこへ栄養分豊かな黄河の土、湧き水の雄である済南の趵突泉の水という最高の組み合わせ。彼は食べ残しの蓮根にこれだけの用意をしたのだ。／それだけに蓮根から芽が出たとき、とても愛しく大きな喜びがありその成長を我が子のように楽しみにしていた。やがて白蓮が見事に咲く。食べ残しの蓮根から生まれた花ながら婉然たる態は老舎をいたく感動させていたのである。／済南の蓮は夏の風物として唐代から有名であった。また、済南は風流を好む名士が多く住んだ地。その名士たちでさえ自宅で賞でる蓮の花は切り花であり、植えるほ

ど凝った人物はいない。老舎は自ら植えた幸せをジックリと味わっていた。そして愛する白蓮を題材に、あれこれと詩稿を練りあげる。それでも尚足りず、この思いを如何せん、と独りドキドキしながら考えていた。／そんなある日、友人が尋ねてきた。「よくぞ訪ねてきてくれた、幸いなりに」と老舎は蓮の自慢をしようとする。その矢先、友は／「大明湖へ蓮の花を買いにいこう」といい、老舎の出端を挫く。彼も負けてはおれない。／「花なら買う必要はないよ。我家に花は鉢もあるよ」と自慢気に答えた。／友人を歓待すべく準備を整えて客間に戻った老舎は、「ウッ！」と驚き呆気にとられた。なんと、友は自慢の白蓮の花を一つ残らずすっかり摘み取っていたではないか。／この日のために老舎は新鮮な胡桃を買い求め、家では枝豆を茹でた。これらを肴にして「蓮白葡萄酒」を飲みながら鉢の白蓮を愛でつつ詩を詠むという風雅な企画を立てていた。この楽しみが無残にも打ち砕かれたのだ。／〔☆中略〕／老舎の友人が続いていう。／「お宅のはそんなに柔らかくはないが、まだ使えるよ」そして「よい胡麻油で揚げて欲しい」と、老舎家の料理人にいつけた。老舎はこの注文に仰天する。／北京育ちの老舎は「蓮の花を食べる」というこの奇妙な済南の風習を全く知らなかったのである。／済南では夏になると、野菜売りが野菜と一緒に「束ねた白蓮」を売り歩く。これが一般的な慣習であった。／〔☆中略〕／この済南人好みの「蓮の花料理」を調べると、やはり揚げ物で「炸荷花辨（蓮の花びらの揚げ物）」がある。老舎の友人が「よい胡麻油で揚げて欲しい」と頼んだ料理だろう。ちなみに中国料理のスプーンが「蓮華」と呼ばれるのは、スプーンが蓮の一枚の花弁に似ているからである。／私もひととき老舎と同じく可憐な花を食べることに一瞬ひるんだが、自前の花でこのメニューを作ってみる。〔☆後略〕／〔☆中略〕／〔☆前略〕こう

して試作してみたものの何れも花卉が堅い、という違和感が残った。／先のお客がいった「まだいけるよ」という言葉を思えば、どうやらその柔らかさを差していたのだろう。済南の蓮の花料理に適した花卉はピンクの蓮ではない。それは白蓮で、最初に開花する前の蕾なのだ。蓮の種類にも違いがあったようだ。」

*「まえがき（同書 p. 2）：「小説といえば、文中に「老舎」の話を書きました。済南の蓮の花を食べる習慣を知らなかった彼の驚きです。老舎の話の中に興味深い日中・食文化の差が出ています。」

横田文良「『落花生』に魅せられた老舎—— 地中に育つ落花生——」

同上『中国の食文化研究〈山東篇〉』
p. 198—205

*「老舎は大の落花生好きであった。それで『落花生』と題した短文も著した。「落花生」とは漢名である。その命名は、花が落ちた後、子房の基部が伸びて地中に潜り、その先に実莢が生れることに由来する。」（p. 198）

*「老舎の短文『落花生』は「私は小心者である」に始まり、「ポケット一杯に落花生を詰め込み、それを歩きながら食べると『秦の始皇帝よりも傲慢な』気分になる」という。／「もし始皇帝になったら大臣に食べきれないほどの量を買に行かせる」というたわいもない話である。ま、それほどお好きだったのだろう。／老舎先生のお好みの「落花生」より、中国では西瓜の種の方が名声が高い。それは西瓜の種を八角風味の塩茹でしたもの。先生はそれが気に入らず、食べにくい西瓜の種を皮肉っている。確かにそうだ。あれは食べにくい。」（p. 200）

*「これに比べると『落花生』はよい。殻を割り、豆を出す。剥く手と殻の割り具合も鑑賞して楽しめ、口に放り込んで旨い。私も老舎党である。先生は、この豆を肴に「玫瑰露酒」を飲

みながら詩を作る楽しみを自慢するのだ。／「玫瑰露酒」とは高粱酒に玫瑰(はまなすの花)を漬けて蒸留された酒。日本では点心を作るときの調味料として使うが飲むことは少ない。また、この酒の糖分もメーカーによってかなりの差がある。／老舎先生は、冬の夜、枕許にひとつかみの落花生を置きそれをポリ、ポリッと食べながら『水滸傳』などを読むのだそう。要するに文豪の落花生通でなければ解り得ない旨さかもしれない。」(p. 201)

石井康一「老舎と石揮 — 映画『我這一輩子』を中心に」

山田敬三先生古稀記念論集刊行会
『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』東方書店(7月1日)現代文化篇
p. 427-442

倉橋幸彦「たかがタイトルされどタイトル — 老舎『正紅旗下』執筆の背景」

同上『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』 p. 443-462

倉沢進・李国慶『北京』[中公新書1908]

中央公論新社(8月25日)

*「結局清末から民国時代、北京には腰を落ち着けて都市発展を計画的に進める意図と能力を持った主人公がなく、皇城、内城、外城の城壁城門もそのまま維持された。当然胡同と四合院の街並みもそのまま、北洋軍閥の過酷な政治や日本軍の占領下、生活上の多くの苦難のなかで、老舎(一八九九~一九六六)の『駱駝祥子』や『四世同堂』の世界が繰り広げられていたことになる。」(p. 74)

*「今日内城の四合院が「大雑院」に変わったと言われるが、この名称は外城の「雑院」に由来する。正確に言えば、四合院是北京内城の上流中流の人々の典型的な住居であり、庶民が住

む外城の典型的な住居は雑院である。院という言葉は壁に囲まれた一郭を指すから、住居は壁に囲まれているが、しかし規則的な四合院の形とは異なり、敷地の形状によって、三合院であったり五合院であったりする。／要するに外城の住民にとっても理想は四合院であるが、自分たちの経済力に見合った四合院崩れの住宅に住むということである。一つの院内には、はじめから一世帯ではなく数世帯が雑居し、一家族一部屋で暮らすのが普通である。豪雨が降ればじょうろで注ぐように雨もりするような粗末な家が少なくない。老舎の短編小説『柳家大院』を例に引くと、二〇余間ある院内に何世帯が居住しているかは、はっきりわからない。これは一年以上の居住者は一、二世帯で、多くは今日引越してきたと思えば翌日出て行く、今日二間に住んでいたと思えば翌日は一間に住むという状態の上、みな朝から晩まで食うために奔走し、雑談をする暇がないためである。実際の居住状況はおそらく家主でさえも把握していないだろうという。」(p. 164-165)

◇その他の老舎言及箇所：p. 161・166

倉橋幸彦〈旗人老舎:他的自尊与内疚〉

中国老舎研究会选编

《世纪之初读老舎:2006国际老舎学术研讨会论集》人民文学出版社
(8月) p. 102-112

杉本达夫〈《桃李春风》与1943年的老舎〉

同上 p. 402-416

杉野元子〈20世纪90年代后日本的老舎研究〉

同上 p. 576-584

◆一 日本盛行老舎研究の缘由／二 1990年后出版的有关老舎の書籍／三 1990年后的有关老舎の研究论文:A 老舎与基督教; B 老舎与漱石; C 抗战时期的老舎; D 《四世同堂》; E 老

舎と相声；F 作品的修改／四 老舎之死

* “在写本稿时，我努力收集1990年后在日本出版的有关老舎的所有书籍、1990年后在日本发表的有关老舎的论文以及老舎死后至今日本文学家所写的《老舎之死》题材的作品。但是，只有两月的时间收集文献，一定有疏漏的地方，请各位赐教。”（p.584）

『老舎研究会会報』第22号（9月1日）

◆高橋由利子「【ロンドン通信】イギリスのお墓—老舎ゆかりのエヴァンスとリースのお墓を探して」p.1-4／倉橋幸彦「【上海通信】上海の老舎—老舎とはゆかりのない上海の古書肆で老舎を探して」p.4-5／小生常談『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読(3) p.6-7／倉橋幸彦編「老舎関係文献略目(11)」p.7-18：【2004年〈上半期〉】【2004年〈下半期〉】【2005年〈上半期〉】／辛彦「“補白”老舎(4)」p.19／「老舎通信」p.20／「事務局便り」p.20

田坂憲二「『〈カラー版〉世界文学全集』」

『文学全集の黄金時代 河出書房の1960年代』和泉書院（11月9日）

第三章、p.58-62

* 「さて、六六年一月にスタートした〈カラー版〉であるが、当初は全三八巻別巻二巻の合計四〇冊であった。／窮屈な編集ではあっただろうが、ホメロスからサルトルまでを含み、このシリーズのみで一通りは世界文学の名作を読むことができるようになっている。曹雪芹や魯迅・老舎の冊を設けるなど、欧米のみに偏ることもなかった。」（p.61-62）

伊藤敬一『「老牛破車」のうた—おおらかに、しなやかに日中友好を 伊藤敬一論説文撰集』

光陽出版社（12月20日）

■『老舎研究会会報』第22号、醒眼「会員消

息」（p17）を参照。

〔年末余談一則〕

山崎厚子著『秋瑾 火焰の女』（河出書房新社、12月30日）巻末「参考文献」に次の一項あり。“駱駝の祥子 老舎 杉本達夫訳 岩波文庫”？ もちろん、「立間祥介訳」の誤。

【2008年上半期】

竹内実「コオロギの話」（『コオロギと革命の中国』[PHP新書502]PHP研究所、1月29日、第一話 コオロギの話、p.29-57）

* 「作家の水上勉さんは青年のころ、いまの東北の瀋陽にいたことがあった。後年、これも作家の、老舎さんと会った。老舎さんは日本を訪ね、水上さんはその歓迎会で、会話をかわした。昭和四十（一九六五）年三月。／水上さんはどこかでコオロギを飼う壺を見たようである。細工されたりっぱな壺だった。なんのためにコオロギを美術品の壺で飼うのか不思議におもい、老舎さんに質問した。／「コオロギを闘わせるのだ」と老舎さんは、こたえたようである。中国語ではきまり文句で「闘蟋蟀」というから、通訳が直訳したにちがいない。／つぎのような会話がかわされた（水上勉「こほろぎの壺と柿」『北京の秋』所収、潮出版社、昭和五十六（一九八一）年三月）。／「こほろぎに闘争心があるんでしょうか」／「ありますとも。きわめて、勇敢です」／「どういうふうに闘わせるのですか」／「地方によってやり方はちがいますが、白い布を敷いてその上で闘わせる方法が多かったと思います」／「白布で土俵をつくってやるわけですね」／「そうです。日本の角力と同じです」／「勝負はどこで見分けますか」／「負けたほうは逃げるのです。勝ったほうは残っています」／老舎さんは説明した。二匹のコオロギが白布上でむきあって、ヒゲで相手の力をはかりながら、近づいて取っ組みあうが、それま

でに時間がかかるので、飼い主たちはずいぶん長いあいだ、辛抱強く見守る必要がある。／「(老舎)先生は、こほろぎの姿をごらんになっただけで、強いこほろぎと弱いこほろぎの見分けがおつきになりますか」／「わたしにもおよそのことはわかります。しかし、中国の皇帝や地主たちは、家来に飼わせました。こほろぎを飼う専門の家来がいたと聞いています」／「庶民にはこほろぎを闘わせて遊ぶ風習はなかったのですか」／「子どもじぶんにやった経験のある人はいるでしょう。しかし、この風習は、やがて亡びました」／「すると、わたしが見たあの壺は、地主か貴族の使ったものでしょうね」／「たぶん、そうでしょう。北京などの骨董屋へ行くと、いまもときどき見かけることがあります。／金持ちはぜいたくな壺をつくって、カネをかけて飾りをつけたり、うるしを塗ったりしたものです。そのため、骨董品として価値が出たのだと思います」(「水上勉と老舎のコオロギ談義」p.32-35)

*「中国を訪れたら、ぜひ、骨董屋へ行って、コオロギの壺を求めたいと水上さんがいうと、老舎さんは微笑してこたえた。／「ぜひいらっしゃい、あなたがいらしたら、ご一緒に案内しますよ」／「こほろぎにも夫婦はいるでしょうか、先生」／「いましょうね」／と先生は低い声でこたえられ、／「しかし、くわしいことは、こほろぎにきいてみないとわかりません」／と笑われた。やさしい文学者だった。／わたしは、このときの(老舎)先生の風貌姿勢を、昨日のここのようにいまも思い出すことができる。／老舎さんは北京生まれの北京育ち。北京は城壁にかこまれていたが、草むらはあったし、城壁を一步出れば畑が広がってもいた。幼年時代はコオロギで遊んだはずである。／この会話のあと、北京をはじめ、中国全土をおそった文化大革命の嵐に見舞われ、紅衛兵の迫害にあった老舎さんは、北京郊外の大明湖に身を

投じた(遺族によれば殺害されたという)〔★ママ〕。／水上さんの文章には、言外に哀悼の情が含蓄され、惻々とせまるものがある。ただし、水上さんのこの文章を収めた『北京の柿』が上梓されたころ、中国は大きく様変わりしていた。／新しい政策、「改革と開放」がはじまって、コオロギにも一大ブームが起こった。」(「中国の新しい政策とコオロギ」p.35-36)

「島田雅彦さんが選ぶ世界の古典名作30選(取材・文:生田ユリ)」(『一個人』通巻94号、KKベストセラーズ、3月1日、p.62-73)◇「できれば読破したい!精神の糧となる強力な古典20冊」の一冊に『駱駝祥子』が選ばれている(p.73)

和田哲郎・荻野純一「(文化大革命で悲惨な死を遂げた作家の)老舎記念館」(和田哲郎・荻野純一文/柳木昭信・今井卓写真/旅名人編集室編『北京歴史散歩——中国史の表舞台を見てまわる』[旅名人ブックス100]日経BP企画、3月10日、第8章 北京の町を楽しむ ●北京市内にある歴史的人物の故居を訪ねて、p.308-309)

*「現在、記念館となっているのは、アメリカから帰国した後に死去するまで、十六年間を過ごした四合院造りの家である。広さは四百平方メートルほど。ごく普通の家である。王府井大街と北河沿大街とを結ぶ灯市口西街からちよっと入った、豊富胡同にある。少し分かりにくい場所である。／記念館の看板がかかった小さな門を歩いていくと、左手に事務棟、右手に二の門がある。事務棟で入館料を払って二の門に入る。正面に五種類の色で彩色した木製の衝立があり「福」と書いた書が貼ってある。老舎夫人の胡絮青による書である。こうした五色の衝立は現在の北京では非常に珍しい。／中は四合院造りの典型的な中庭である。中庭を挟んで三

つの家屋が立っていて、それぞれが展示室となっている。右手の一展示室には、これまで出版された老舎の本、彼の書や写真などが展示してある。中には日本語の翻訳書もあった。正面の二展示室が老舎の書斎兼寝室で、彼が着ていた服が掛かっていたり、ベッドにはランプが散らばっていたりと、老舎の生活の片鱗がうかがえる。／中庭に植わっている柿の木は、老舎自身が一九五三年に植えたものという。今はもうすっかり大きくなって、母屋の屋根をはるかに凌ぐ高さには達している。これらの木々は成長とともに、主人の静かな執筆生活、そして文革の嵐に翻弄された最晩年の悲劇を見守ったのであろう。柿の木が主を失ってからすでに四十年余、今日も青々とした葉を豊かに広げ、夏の日差しを和らげている。」

大山 潔(陸潔)「中日対訳本『戯曲 駱駝祥子 第一幕』出版記」(『東方』第326号、東方書店、4月5日、p8-12)

*「昨年二〇〇七年は中国話劇百周年、北京人民芸術劇院(人芸)成立五十五周年、『駱駝祥子』脚本化五十周年、日中国交正常化三十五周年に当たります。この節目の年に私は、私の家に中国語を習いに来ている三人の生徒(富岡由紀子・三富志恵子・榎本智子)と中日対訳本『戯曲 駱駝祥子 第一幕』(老舎原作・梅阡脚本、樹花舎)、及びその朗読CD(自主制作)を出版しました。／本のスタイルは最初から決めていたわけではありません。ある時榎本さんが「私が読者だったら対訳本の方が有り難いな」と言うのを聞いて中日対訳本に決めました。ピンインについては私にある考えがありました。中国語教材には字引通りのピンインがついています。しかし、実際の中国人の会話には字引通りではない発音が沢山あります。そうしたネイティブのリアルな発音・話し方を伝えることはできないものか、そうしたピンインの付け方

はできないものかとずっと考えていました。これはチャンスではないか、古き北京が舞台の『駱駝祥子』の台詞一つ一つに軽声、アール化、北京訛など特徴ある北京語の発音が伝わるように思う通りピンインを付けてみよう、そんな本が一冊くらいあってもいいのではないか。そう考えてピンインを付けることにしました。また、中国語を教えていて言葉で説明してもなかなか分かってもらえず絵や写真があれば助かるのにと考えた経験から図版を多く入れたいと思いました。幸い朝日中国文化学院の横尾亜由美さんがボランティアで私たちのイメージ通りの素晴らしい挿絵を沢山描いて下さり、人芸博物館が舞台写真を提供して下さいお陰で、私たちが北京で撮った写真等と併せて、図版がふんだんに入った本にすることができました。／難問は出版社探しでした。自費出版の覚悟でしたが、もしやと思い打診した中国図書大手出版社には全て断られ、自費出版大手からの見積も私たちには無理な金額で困っていると、知人から樹花舎を紹介され、見積もってもらおうと大手の半額以下でした。これなら私たちでも何とかかなると思い、お願いすることにしました。／出版社は決まったものの、ここで著作権問題という更に大きな問題に直面することになりました。戯曲の作者が梅阡であることしか分からない私は梅阡の連絡先を調べることから始めました。幸い北京の母のついでに梅阡夫人の電話番号が分かったので、兄から問い合わせてもらったところ、梅阡夫人のお子さんらしい方が電話に出られ、梅阡は一年余りに亡くなり、著作権は夫人にあるので、翻訳出版するのであれば出版社が夫人に連絡をとって著作権を支払い、訳者に対しても翻訳費を支払うようにということでした。／樹花舎の花村健一さんに相談すると、何とかして梅阡夫人に著作権を放棄してもらうように言われました。そこでその申し入れを北京の家族に頼んだところ母は激怒しました。

非常識で無礼なお願いだというのは分かっています。母が怒るのももっともです。でも自費出版なので出版社に著作権交渉や著作権費負担は頼めません。私たちの経済力には限りがあるし、出版しても利益は期待できなくなれば、やはり著作権放棄をお願いするしかありません。私は梅阡夫人に手紙を書くことにしました。私たちのこと、翻訳出版の動機、自費出版しかない困難な状況、戯曲『駱駝祥子』の正式な翻訳がない日本の現状などを一生懸命に説明し、最後に「著作権を放棄して頂けないでしょうか」と書いた手紙を祈るような気持ちで投函しました。／しかし八ヶ月たっても返事はありません。やはりだめなのか。でも、その確認だけでもと、思い切って梅阡夫人のお宅に電話をかけてみました。すると梅阡夫人ご本人が電話に出られ、信じられないことに、夫人は私たちの翻訳出版に対して全面的に支援するし、私が北京に帰省したら資料を見せてあげようと仰って下さり、更に梅阡先生の逸話まで話して下さいました。五ヵ月後の二〇〇四年八月九日、私は初めて梅阡先生のお宅で梅阡夫人にお目にかかることができました。夫人は資料を用意して下さいただけでなく、先生のお葬式の時のDVDを見せて下さり、先生の闘病生活や夫人の胸に抱かれての最期の様子、先生の死後夫人はひどい鬱状態に陥り、一年以上も部屋の中に引きこもって外部との接触を拒んでいたこと等を話して下さいました。私の手紙が届いたのがその時期で返事も出せなかったということでした。夕暮れ、窓から射し込んできた夕日の中、「あなた達がこんなに一生懸命先生の作品を翻訳し、日本の皆さんに伝えようとしていることを、先生は天国でどんなに喜んでいらっしゃるでしょう。あなたがもう少し早く来てくれたら先生にも会えたのに」と静かに語られる夫人のお顔を見ると、それまで先生の話をする間止まることのなかった涙は乾き、とても穏やかな表情をされていました。

そのとき私は「愛」を感じ、この日は生涯忘れられない日となりました。／次に、連絡先が分からなかった老舎のご子息舒乙先生宛の手紙を老舎記念館へ出しました。（後で分かったことですが）当時中国現代文学館館長として大変お忙しかったにもかかわらず先生はお返事を下さり、「著作権放棄に同意します。順調に一日も早く出版できるよう期待しております。ご成功をお祈りします」という心強いお言葉を頂きました。／二〇〇七年二月、とうとう私たちの『駱駝祥子』が出来上がりました。夢のようだとみな大喜びし、癌を乗り越えた富岡さんは「これはこの世に私という人間が存在した証になるのです」とまで言うてくれました。彼女の思いが痛いほど伝わってきて私は涙が出そうでした。／『駱駝祥子』は戯曲であり語学教材でもあるので音声版が是非とも必要と考え、続いて朗読CDの制作に取りかかりました。問題は吹込者です。梅阡先生は人芸の舞台監督であり、人芸は彼が脚本化した『駱駝祥子』を初演以来五十年間上演し続けてきたのですから、人芸の役者が朗読してくれれば最高です。でもコストと労力がかかるし、そもそも見ず知らずの私たちがお願いして自費出版CDの録音になど参加してもらえるでしょうか。無理と思いつながらも以前お世話になった人芸博物館副館長于文萍女史にお手紙をお願いをしたところ、一ヵ月後人芸の役者が録音を承諾したとお返事を頂きました。／三月、お世話になった方々に本を贈呈し感謝を伝えるためと、朗読録音のために、私たちは北京を訪れました。人芸では公演間近の『駱駝祥子』の稽古を見学させて頂き、会議室で役者たちの素晴らしい朗読を録音することができました。梅阡夫人と舒乙先生は私たちを暖かく歓迎し、心からもてなして下さいただけでなく、朗読の録音にも参加して下さいました（ナレーションの一部）。日本に帰ると私たちは北京での感動の数々を文

章に綴り、樹花舎のHPに載せて頂きました
 (http://kinohanasha.la.coocan.jp/rakuda.html)。／こうして録音は無事すんだのですが、十一月に出版社から担当者の入院や私たちの資金不足のためCD制作は無期延期という連絡が入りました。節目の年にこの貴重な音源を何としても世に出したいとの思いで「自力更生」の道を選ぶことにしました。教え子や友人が買ってくれた本の売上があったので、それを使って自宅のPCでCDを制作し、冊子のデザイン、印刷、装丁まで全て自分たちでやり、十二月二日ついに私たちの百パーセント手作りのCDが誕生しました。／北京に生まれ、『駱駝祥子』を初めとする話劇に魅せられ演劇の世界を志したこともある私にとって『駱駝祥子』は思い入れの深い大好きな作品です。『駱駝祥子』といえば老舎の代表作として日本でも有名ですが、中国では老舎の小説としてよりも、むしろ様々な舞台劇、映画として親しまれてきました。その出発点にあるのは梅阡先生による脚本化であり、もしそれがなければ『駱駝祥子』がこれほどまでに人々に受け入れられることはなかったかもしれません。ですから日本では戯曲版があまり知られておらず、正式な日本語訳もないことを知り私は驚きました。この本によって、中国人、特に北京の庶民が愛してやまない話劇『駱駝祥子』の魅力に触れて頂ければこんなに嬉しいことはありません。また、人芸の一流の役者と梅阡夫人、舒乙先生によって吹き込まれた朗読CDは付録CDという以上に価値のある「作品」、「記録」だと思います。洗練された生粋の北京語による素晴らしい朗読で『駱駝祥子』の世界が生き生きと表現されています。中国語学習のためだけではなく多くの人に聞いて頂きたいと思います。」

◇写真2葉：『戯曲 駱駝祥子 第一幕』テキストとCD／北京人民芸術劇院専用劇場―首都劇場にて記者一同（2007年3月）

事務局便り

◇2008年度大会は9月15日〔月〕に、舒済さんをお迎えし、大阪産業大学梅田サテライト教室（大阪駅前第三ビル19階）で開催されました。舒済さんの講演は予想通り“叫座儿”で、50名以上という例年にない多くの方の参加をいただきました。

◇当日の報告・講演とテーマは次の通りです。
 （報告）

倉橋幸彦：老舎研究会25年の牛歩を
 回顧して

（講演）

舒 済：満族と老舎

◇今号の発行に際しては、杉本達夫・布施直子会員には、本当にご無理をお願いいたしました。内情を白状しておく、原稿を正式に依頼した（泣きついた）のが8月9日。それからわずか一週間、ご両人とも8月16日に原稿をお寄せいただきました。神業としか言い様がございません。この場をお借りして、“厚く熱く”御礼申し上げます。

◇そんなわけですから、せっかくの老舎研究会の新しい船出にも関わらず、新企画などは到底望めるわけがございません。もっとも、変わらぬ「牛歩」も芸の一つとも言えるのではないのでしょうか。

◇ともあれ、エッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちしています。奮ってご投稿下さい。とりあえず、次号の原稿締め切りを来年の6月末にしたいと考えております。

(C) 2009年8月17日

老舎研究会会報第23号（2009年9月5日）

〒574-853 大阪府大東市中垣内3-1-1
 大阪産業大学人間環境学部（倉橋）研究室
 老舎研究会事務局
 TEL：072-875-3001（代表）

